

かいぼり Q&A (4 / 1 8 版)

北川かっぱの会 2018/04/18

北川かっぱの会関係者で「かいぼり」に参加する人向けに、参加者の意思統一を図っていく目的で作成。

■今回のかいぼりの意義

- ・在来生物を守っていくために、外来生物(ウシガエルやアメリカザリガニ、アカミミガメ、コイなど)を駆除していくこと
- ・外来生物の駆除と池干し期間(約2週間)の設置により水質が浄化すること
- ・水辺の地形を改善し、水辺に土※を入れることにより、生物が生息しやすい環境としていくこと

※土;八国山ふたつ池の泥をしょうちゃん池に入れる。この泥に混ざっている埋土種子の発芽に期待(東村山市では既に消滅してしまった希少植物の復活に繋がる可能性がある)

- ・池の魚類等の生息状況を調査し、8年前の「かいぼり」の結果や、来年度以降将来に実施するであろう「かいぼり」の結果と比較し、しょうちゃん池の環境の変化について把握していくこと
- ・外来生物の問題点について市民にアピールしていくこと
- ・公園の外来種防除に市民が参加していくことが定着していくこと

■外来生物とは

もともと生息していなかった地域に、"人の手"で他の地域から入ってきた動植物。

※渡り鳥などは自分の力で移動しているので、これには当たらない。

外国から来た生物だけというわけではなく、国内でも上記に当たる場合は「国内外来生物」となる。

※本来カブトムシがいなかった北海道では、ペットとして持ち込まれたものが定着し、問題となっている。

■なぜ外来生物が問題なのか

まず大前提として、その生物自体が悪いというわけではなく、彼らの意図とは無関係に移動を行なった「人間」の活動に問題がある。

移入された地で天敵となる生物がいなく、大量発生して在来の生物の生息の場を奪ったり、在来の生物を食べてしまったり、現地の近縁の種と交配し、交雑種が生まれ

るなど生物多様性、生態系に悪影響がある。

※タナゴは、中国原産のタイリクバラタナゴの影響で在来種のタナゴ類が激減している。

歴史的に見てもそもそも生物というものは、新たな生息地を求めて移動を繰り返して来たが、それは無制限というわけではなく、一世代では到底越えられない山や海に阻まれ、生息域、分布域は限定的であった。そのことがその土地ごとの生物多様性につながっていたはずであるが、人間による輸送手段の発達などによってそのバランスが崩れてしまった。

■ウシガエル

食用として 100 年前にアメリカから持ち込まれた。外来生物法により特定外来生物に指定されているため、捕らえて持って行くことなどは禁じられている。他のカエルや昆虫、小動物（ネズミや小鳥など）など、その大きな口に入るあらゆる生き物を食べてしまう。卵塊も大きく繁殖力も旺盛。オタマジャクシも大きく越冬するため、生態系への影響が強い。世界の侵略的外来種ワースト 100、日本の侵略的外来種ワースト 100 に指定。

■アメリカザリガニ

緊急対策外来種。ウシガエルのエサとして輸入された。アメリカからの長い船旅で生き延びたのはたった 20 匹であったが、強い繁殖力により日本全国に広がった。動物植物を問わず、水生生物を食べてしまう。深い巣穴を掘るため、田んぼの水が抜けてしまう。雨の日などは陸上も歩き、生息域の拡大も盛ん。

※日本の固有種であるニホンザリガニは、北海道と東北の一部に生息するのみで、関東には生息しない。

日本の侵略的外来種ワースト 100 に指定。

■ミシシippアカミミガメ

緊急対策外来種。ペット用として 1950 年代に輸入が始まった。現在では日本全国に 800 万匹いるとも言われている。在来のカメと交配することはないが、原産国アメリカではブラックバスやウシガエル、果てはワニなどがある地域に生息するため、日本在来のカメに比べ警戒心、捕食力、俊敏さ、汚れた水などへの耐性が高い。レンコンやハスの根を食べることから、農業被害や佐賀城のお堀などでの被害が報告されている。

近い将来、特定外来生物にという動きもあるが、数が多すぎるために指定することすら難しくなっている。

世界の侵略的外来種ワースト 100、日本の侵略的外来種ワースト 100 に指定。

■クサガメ

かつては日本の在来種と考えられていたが、化石が出ないことや江戸時代以前の文献に

見られない（浮世絵などは全てニホンイシガメの特徴を備えている）ことから 18 世紀末に中国大陸や朝鮮半島から移入されたと見られている。

ニホンイシガメと交雑してしまうため、ただでさえ数を減らしている同種に対して大きな脅威となっている。

■ コイ

日本在来のコイは琵琶湖など一部地域に残るのみ。最近まで日本在来種として親しまれていたが、主に観賞用（※食用も入れてもいいかもしれませんが）として、古くから国内で意図的に移植されており、さらに明治以降は輸入されたものも放流されているため、在来集団との遺伝的攪乱が進んでいると考えられている。

在来のコイと交配してしまう、水底を巻き上げて水質を悪化させてしまう、他の水生生物を食べてしまうなど、環境への大きな影響がある。

我が国では、2014 年の井の頭池のかいぼりからコイの本格的な駆除がはじまり、現在、都立公園のかいぼりでは駆除の対象として定着している。世界の侵略的外来種ワースト 100 に指定。

■ かいぼりの捕獲物（在来生物）は持ち帰ることができるのか

かいぼりの大きな目的の一つは、外来生物を駆除し生息していた在来生物を元の池に戻すことです。今回、捕獲した在来生物は、貴重な捕獲物として元に池に戻していきます。

■ 捕獲した外来生物はどうするのか

冷凍庫に入れ死なせた後、埋葬する。冬眠する生物なので、温度を下げることでより眠るように死なせるのが最も安楽な方法である。

■ なぜ 4 月にかいぼりなのか？

自然や生物に興味がありながら、これまで防除活動に参加してこなかった方々、特に将来自然環境の保全を担っていく子供たちにも気軽に参加してもらうために、比較的気候が穏やかな時期に実行していくこととした。

■ 8 年前のかいぼりの魚類調査結果は

2010 年 3 月に実施。多くの在来種を捕獲した一方、オオクチバスやアカミミガメ、ワタカ（琵琶湖周辺で生息、国内外来種）、アメリカザリガニ、そして大量で大型のコイを捕獲（別添参照）。

■ 北川かつぱの会での捕獲状況（しょうちゃん池や菖蒲田）は

	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
アカミミガメ	9	11	4	2	5
クサガメ(再捕獲を含む)	13	10	8	1	5
ウシガエル (成体)	2	1	3	42	106
ウシガエル (幼生)	10	24	約 550	192	86
アメリカザリガニ	99	126	約 550	約 760	1127